

*Sukerari Iwamoto*

神学と人文 第17集 1977年12月発行抜刷

トマス・クランマーの聖餐論

岩本助成

# トマス・クランマーの聖餐論

岩本助成

## I はじめに

Peter Brooks の Thomas Cranmer's Doctrine of the Eucharist に与えた Gordon Rupp 教授（ケンブリッジ大学）の序文によれば、「大主教トマス・クランマーの聖餐観は、長期間にわたる錯綜した論争の主題となっており、その結末はまだついていない」とある。又、複雑で多様な構造を持つ彼の背景との関連から、この主題を考察すべきことを示唆している。<sup>(1)</sup> 小論の目的は、この偉大なる英国宗教改革者の聖餐論をその背景と共に考察すること、ひいては、クランマーの聖餐観の核心をも明らかにして行くことにある。

## II クランマーの聖餐論の背景をめぐって

### 1. クランマーと大陸の改革者との関係

我々はカンタベリー大主教、トマス・クランマー（Thomas Cranmer, 1489-1556）を中心とした英国宗教改革が、大陸の宗教改革から見て「第二期」とか「第二段階」とか呼ばれる時代に進行したことを忘れてはならない。例えば、1529年10月のマールブルク会談から1549年の「英国国教会第一共同祈禱書」までには、二十年という歳月が流れているのである。この事実を大陸の改革者から見ればこういうことになる。彼らはヘンリーやエドワードの治政下、国際的にも国内的にも激動を続けるこの島国をじっと見守った。右に左にと揺れ動きつつ一進一退を繰り返すこの国の改革者たちに、鋭い批判と強い援助を与えつつ、自分たちの遂行してきた改革

事業を彼らに反映したいと願ったことであろう。又、この事実を克蘭マーたちの眼から見ればこういうことにもなる。

彼らは少し時を隔て距離を開いて、大陸において進行して行く改革事業を凝視できた。聖餐論争におけるような、プロテスタント陣営内での一致点と相違点についても、各々の立場から学ぶことができた。激動と苦悩にみちた生涯を送った克蘭マーにも、好運な一事があった。彼が比較的印刷が容易にできる時代に生き得て、古代教会教父の著作を初めとして、当時の改革者の著作からも多くを吸収して、その該博ぶりを発揮できたことである（いつもペンを手にした遅読者であったが、同時に精読の人でもあった）。

克蘭マーはルター、カルヴァン、ツヴィングリ、エコランパディウス、エラスムスを熟読した。プリンガーは、三十年間にわたって英国宗教改革者に多大な影響を与えたと評されている。<sup>(2)</sup> クランマーが英国に招き、直接その教えを受けた主な改革者を列記しただけで以下のような。第一にブツァー (Martin Bucer, 1491-1551。1549年に渡英しケンブリッジ大学の欽定講座神学教授となる。第一、第二祈禱書及び聖職按手式文 (Anglican Ordinal) への影響は有名。De Regno Christi はエドワードに献呈されている)、第二にはヴェルミーリ (Pietro Martire Vermigli, 1500-1562。1547年に渡英し、オックスフォード大学教授となる。彼の聖餐論も今日、大いに研究されている<sup>(3)</sup>) がいる。その他、オキーノ (Bernardino Ochino, 1487-1564)、トレメリウス (J. Immanuel Tremellius, 1510-1580)、フェギウス (Paul Fagius, 1504-1549)、ア・ラスコ (Johannes A Lasco, 1499-1560) らが、それぞれ克蘭マーの招きでドイツ、イタリア、ポーランド、スペインなど大陸各地から渡英し活躍している。このほか、彼はカルヴァンにも訪英を請うたし、プリンガーもその一著作をエドワードに献じている程である。

人は、克蘭マーと大陸の改革者との密接な関係を見て、それ故に英国宗教改革は大陸での改革の二番煎じであるまいかとか、克蘭マーの聖餐

論が獨創性を欠く理由はそこにあるとか評するかも知れない。だが次の点をも加えて考えて欲しい。クランマーは英国人独自の気風からか、彼自身の穩健さと博識からか、決してある特定の人物やある特定の立場だけに追隨して行かない。渡英した改革者の多彩な顔ぶれ、多様な思想がそれを実証する。更に、結局は失敗に終った計画ではあったが、英国における改革者会議の開催と合同の推進への彼の提議などを考え合わせると、クランマーこそが大陸での聖餐論争などでともすれば見失われ勝ちであった、大局的でエキュメニカルな視野を有していたと評することさえできる。<sup>(4)</sup> 彼の聖餐論に明らかなのは、確かにそのツヴィングリ的傾向であり、事実、彼はツヴィングリ、エコランパディウス、プリンガーに多くを学んだ。だが、ただそれだけを見て彼の聖餐論はツヴィングリ的だと断じてよいであろうか。周知の如く、彼はかつては化体論（全実体変化説）者であった。それを自ら清算して行く過程で、彼はツヴィングリ的傾向を多く吸収して行かざるを得なかったのではあるまいか。だが、改めて聖餐の核心とは何かを自らに問う段階となった時、彼はそのツヴィングリ的傾向への否定を示し始めたようである。（この点、その他の見解は別としても、彼がツヴィングリ主義者でなかったとするエルトン（G. R. Elton）の理解は正鵠を得ている）。<sup>(5)</sup> つまりクランマーは、幅広く多様な知識を吸収しつつ自分たちの状況を現実的に把握、それらの知識を取捨選択して彼自らの聖餐論を形成して行ったと言える。そしてそのことは、この第二期の改革者の持つ性格と特質において、積極的に評価すべき事柄である。

## 2. クランマーと国内の激動について

英国における宗教改革の歴史とその中心人物としてのクランマーの生涯とが、いかに激動にみちたものであったかを否む者はあるまい。ヘンリー8世は申すに及ばず、エドワード6世の摂政サマセット公、その失脚後のノーサンバランド公らを初めとする政界や教界との関係は常に激動していた。改革の事業には、常に反対派の策動や反動、殉教や一揆をもってする抵抗という状況が伴ない、逆に改革をなまめぬるとする急進派からの批判

や策動も彼を待っていた。1547年1月、ヘンリーはクランマーの手を握りながら年僅か九歳のエドワードを託して世を去った。「『教皇のいないカトリシズム』が、カトリック、プロテスタント双方からの攻撃に耐えて存続することができるのであろうか」<sup>(6)</sup> という現況に近かったと思う。

ヘンリーのもとで生き抜き得たクランマーを、優柔不断で遊泳術を心得た人物と評することも、逆にヘンリーの政治的賢明さだけに帰すことも当を得ていない。むしろクランマーが聖書の御言に立って福音信仰の真髓を極めようと志したこと、穩健な精神と地味な努力とで誠心誠意、英国国教会の形成と発展に腐心したことを改めて悟らされる次第である。従ってヘンリーとの関係についても、「ヘンリーは自分と全く違った、野心も銜もない誠実なクランマーの人柄に奇妙な愛着を寄せていたとしか考えようがない」<sup>(7)</sup> とは、正しい理解と言うべきであろう。

聖餐論についても、同様なことが言える。クランマーは彼の言説を巧みに用いつつ、それらにカトリック的解釈を施そうとしたガーディナー (Stephen Gardiner, 1483/90-1555, ウィンチェスター主教) と論争を繰り返さざるを得なかった。又、フーパー (John Hooper, 1495-1555, ア・ラスコに傾倒したブロスター主教) の急進論にも批判された。しかし、中心的助言者であったリドリ (Nicholas Ridley, c.1500-1555, ロンドン主教) やラティマー (Hugh Latimer, c.1485-1555, ウスター主教) の助言を受け入れつつ独断をもって決裁することなく、一致と調和に努力しながら聖書的で福音的な聖餐論の形成を志したのである。

上記の背景との関連で付記しておきたいことは、オックスフォード教会史事典<sup>(8)</sup> や H. Davies の研究<sup>(9)</sup> に指摘されているように、クランマーが「エラストゥス主義者」であったという事実についてであるが、それについてはこれ以上ふれないこととする。

### 3. 最近のクランマー研究史について

ここでクランマーの聖餐論が最近の研究ではどのように取り上げられているかを述べておく必要がある。

### (1) ツヴィングリの解釈に近いと理解する傾向

F. M. Powicke は、その著、The Reformation in England, 1941年においてそのような理解を示した。更に Dom Gregory Dix も名著、The Shape of the Liturgy, 1945年においてその立場を踏襲した。又、Cyril C. Richardson は、G. B. Timms の反論を受けはしたが、Zwingli and Cranmer on the Eucharist, 1949年においてこの立場を確立させたと言っているであろう。

### (2) 教父研究から独自の解釈を樹立したと理解する傾向

第一の傾向に対する明らかな批判を、この傾向は示している。C. W Dugmore は、The Mass and the English Reformers, 1958年においてクランマーは大陸の改革者に学んでその聖餐論を形成させたいというよりも、伝統ある英国の教父学研究を背景とした彼独自の古代教会、中世教会研究の中からそれを形成して行ったものであると主張する。Bromiley も指摘するのだが、クランマーの教父研究の重要性は改めて刮目せねばならぬ事実のようである。Dugmore の主張を延長すれば、以下のような石原謙の結論に相通じるのかも知れない。「その限りにてはアングリカニズムの形成は宗教改革運動の継続らしく見えるが、それにもかかわらずもはやその精神を異にし、改革的原理の基準ではなく、イギリス国民の政治的、教会的独立運動の一過程の趣きを呈する。そのためそれは、中世期、少なくとも第十三、四世紀頃から胎動して近世に至って熟し、長い期間を費し、多くの犠牲を忍び労苦と経験を重ねて、ようやくに到達した結実を意味する」。(10)

更に、カトリックの陣営から、Francis Clark が Eucharistic Sacrifice and the Reformation, 1967年を著わして、同傾向とも言える問いかけをしている。

以上のように、相対立する二つのクランマー理解、クランマー像を提出したのであるが、両者を調和し折衷したような形での理解を示す学者もいてその成果を世に問うている。

### (3) カルヴァンの解釈、改革派的解釈に近いと理解する傾向

第三の傾向は、克蘭マーをカルヴァンに近くと言うか、改革派的理解に近く理解する研究者の傾向である。

Walther Köhler の大冊、Zwingli und Luther, 1924年を精読したと言われる Peter Brooks が、Thomas Cranmer's Doctrine of the Eucharist, 1965年なる研究書を出した。彼は克蘭マーの聖餐論の形成過程を丹念に跡付けている。結果は、克蘭マーがツヴィングリ的傾向を十分に示す事実を承認しつつも、ツヴィングリ的立場と断ずることは躊躇を覚えており、カルヴァンに近い独自の理解を持つ者と結論づけているように思われる。

筆者の恩師、G. W. Bromiley も克蘭マーの研究者として著名である。ツヴィングリをも十分に研究している彼は、<sup>(11)</sup> Thomas Cranmer, 1956年、及び Thomas Cranmer, Theologian, 1956年の二著を出し、又、"Thomas Cranmer," Reformers in Profile, (ed. B. A. Gerrish), 1967年も執筆している。克蘭マーを、学者、教会人、改革者、神学者、殉教者という五つの像から描き出し、克蘭マーが大陸の改革者に啓発されつつも独自の教父研究のもとで聖餐論を形成して行ったと力説している。(尚、Brooks と Bromiley には、筆者が克蘭マーの著作を読み進める上で、特に負う所が多かったことを付記しておきたい)。

## III クランマーの聖餐論概観

克蘭マーの聖餐論は、主として二方面から概観され得よう。第一は、ガーディナー主教との聖餐論争から、第二は、祈禱書などの形成過程から概観する方法である。

### 1. ガーディナーとの論争に見る克蘭マーの聖餐論

克蘭マーは自説の展開を、Defence of the True and Catholic Doctrine of the Sacrament of the Body and Blood of Our Saviour Christ,

1550年, (Ed. Wright, London, 1907) —以下, Defence と略記——及び, ガーディナーへの反論, A Crafty and Sophistical Cavillation devised by M. Stephen Gardiner……against the True and Godly Doctrine of the Most Holy Sacrament……with an Answer, 1551年 (Ed. J E Cox, 1844) —以下, パーカー協会版であるため, P. S. I と略記, 尚, 「書簡集ほか」は P. S. II と略記——において試みている。さて, クランマーの聖餐論の内容検討に移る前に, 留意しておきたいことがある。

(1) 彼はルターやカルヴァンその他の著名な改革者のように膨大な著作を残していない。本来, クランマーの願いは, ケンブリッジ大学に留まって研究に没頭することにあった。だが強いられた形で主教座につかせられ激務に明け暮れることとなる。従って彼がペンをとり得た時には, 自分で最も重要なことだと確信するテーマについて論述したのである。それが主として聖餐論であった。聖餐論は, 彼においては, 神と人間との根本的な関係として取り上げられている。贖罪主, 救い主, 教会のかしらなるキリストの犠牲への正しい信仰, この犠牲のみによる救い, 義認, 罪の赦しの福音が, 正にそこで問われているのである。従って聖餐論は, 教会論の光のもとで, ひいてはキリスト論, 受肉論, 救済論, 聖霊論, 信仰論などとの関連においてのみ論述され得るものである。論争の枝葉末節の関心が彼を把えたのではない。クランマーは自ら信じる聖餐の教理を明示することによって, 対立する人々との福音信仰の基本的相違が明示されると信じたのである。<sup>(12)</sup>

(2) さて, 彼は自分の著作のどこにも, その聖餐論形成の歴史を述べてくれていない。我々に推測できることと言えば, その形成の歩みは極めて漸進的であつたらしいということくらいであろう。

Brokes の前での學問で, クランマーは三つの異なった教理の罪状, 即ち, ローマ派として, ルター派として, 及びツヴィングリ派として糾弾されており, それらを三つとも否認していることは興味深い。<sup>(13)</sup> 祈禱書形



成の過程や彼の妻の関係からルター派の影響を説く人もあるが、ヴェルミ  
ーリほかの感化を受けつつ、先ずローマ派としての全実体変化説から脱却  
した。クランマーにとって中世後期の聖餐犠牲の教理は、キリストの贖い  
の中心性を覆えすものであった。人間がミサの代償的犠牲という方法で神  
に何かを献げ、それが救いに連なるという考えは福音の中心的生命を危う  
くするものである。「キリストの犠牲は、一度ささげられて永遠に充足さ  
れたものである」。(14) 彼は漸進的に進みつつ、しかも徹底的にこの真理を  
説こうとする。「除々に、私は以前の無知から離れた。最初に全実体変化  
説を捨て、遂に(身体的)現臨説を捨てた」。(15)

(3) このようにクランマーの聖餐論は、他の改革者と同様に、その否定  
的見解を明らかにするという形で始められている。1538年8月15日付のク  
ロムウェルへの手紙(16) は、全実体変化説への疑問を暗示する。彼自ら奉  
じてきたこの信仰は、第一に神の言に反し、更に自然的本性にも、理性に  
も、全感覚にも、そして又、教父に代表される古代教会の信仰と伝承にも  
反するものであることが彼自身の中に鮮明になってきたのである。続いて  
彼は聖餐におけるキリストの身体的現臨説を清算させられることとなる。  
ヨハネ6:63を引用した後で、彼はこう述べている。これらの御言につい  
て、「我々がキリストを我々の齒で粗野に、又、身体的に食すると理解し  
てはならないのであって、身体的に言えば天に在したまい我々のもとには  
在したまわぬキリストを、信仰をもって、靈的に、聖霊にあって、食する  
ことを理解せねばならない」(17) と述べる。次に、彼がツヴィングリ派で  
はなかった点に触れねばならない。クランマーは聖餐におけるイエス・キ  
リストの「真正な現臨」は否定しない。聖餐の物業であるパンとぶどう酒  
は、それらが「ふさわしい形」で受けられ、キリストの肉と血が靈的に飲  
食されるならば、彼らに力と実効を現わし彼らを永遠の生命に養うのであ  
って、物業は「単なる空しい裸の表象」ではあり得ないのである。(18) 彼  
はガーディナーへ次のように反論している。「あなたは私の発言を不当に  
集めて、キリストは現臨されないと発言しているかの如くにしてている。私

は（神の御言と古えの著作家の教理により）キリストは御言に現臨して聞く者の心に力強く働いておられると教えられているように、彼の聖礼典の中にも現臨しておられると語っているからである」。(19) 彼はとうも語る。「もしあなたがこの語 really を re ipsa「事柄そのもので、実効的に」という意味に解するなら、キリストはその受難の恵みと効力によって、すべての彼の真実で聖なる肢体に対し、現実に真正に現臨される。だがもしあなたが、この語 really を corporaliter「身体的に、肉体的に」という意味に解するなら、キリストの身体が自然的で有機的の身体と解されているので……それは神の聖なる御言にもキリスト者の告白にも背反するものとなる」。(20)

Bromiley の研究によれば、ある時点までクランマーはキリストの神性だけで聖餐におけるキリストの現臨を考えていたという痕跡があるという。(21) 彼は「ただ我らの主イエス・キリストが神として遍在したもうことを疑うな」とのアウグスティヌスのことばを引用したり、(22) 世の終りまで共に臨在されるキリストの約束を強調したりする。しかしクランマーは聖餐におけるキリストの現臨を、その神性に限定する時、福音における本質的問題、即ち、我々の救いの為に御言が肉となられ、その肉をさき血を流されたキリストの受肉と受難の事実に対する認識が危うくされてしまうことを悟る。かと言って、人性においては、その肉体をもって復活したまい神の右に坐したもうキリストが、同時に「身体的、肉体的に」聖餐に現臨されると説くならば、キリストの真の身体と御子の両性とは引き裂かれる結果となってしまふ。彼は「この聖礼典を飲食する者には誰にでも、キリストが、即ち、生まれたまい受難したまい、甦えりたまい高く挙げられたもうた全キリストが臨在されることを信じる」(23) と述べた。だが一体、いかなる身体でキリストは聖餐に現臨されるというのか。問題の核心は恐らくこの点にあり、これがクランマーの肯定的発言と考えてよいであろう。

(4) クランマーの答には二つある。第一に彼はキリストの「礼典的」現

臨を説く。「キリストは人性にあっては、実体的に、現実に、身体的に、本性的に、感覺的に、在天の御父とともに現臨される。然もキリストは礼典的に、靈的に、ここに現臨される。しるしと礼典におけるものとして、水において、パンとぶどう酒において彼は現臨される」。(24) 我々はそこで単に受肉と十字架の主を想起せしめられるのではない。御言とともに差し出された物素を、我々が見、手にとり、味わいつつ全キリストを所有し、そのすべての賜物に与からしめられるのである。そしてこのことを可能となしたもうのが聖靈である。「我々はかく彼に結び合わせられる。彼の肉が我々の肉となるまで、彼の御靈は彼を我々にしっかりと結び合わせたもう。又、我々の肉は彼の肉とされ我々の骨は彼の骨とされ、彼はそのかしら、我々をその肢体としてすべてが一つの神秘なる身体とされるのである」。(25)

第二の答は、「靈的」現臨である。即ち、真の内的な信仰をもってふさわしく物素を受ける時、その現臨を鮮かにしたもう「靈的な」現臨である。「我々是我々の魂が信仰によって、彼の身体そのものを食し、血そのものを飲むことを認める。しかしそれは靈的に同じ永遠の生命を摂取することである。だがこの靈的な養いがいかなる肉体的な現臨を要求することをも拒否する」。(26) 次のクランマーの文章は、以上のことを要約していると思うので少し長いが引用したい。「キリストの身体と血そのものを真に飲食するとは、絶えざる信仰、活ける信仰をもって以下のことを信じてことなのである。即ち、キリストが我々の為に、十字架上でその身体を与えその血を流して下さったこと、そしてかく彼自らを我々と結び合わせて一体となって下さること、彼が我々のうちに宿りたまひ我々が彼のうちに宿ることによって、彼はかしら、我々はその肢体、彼の肉の肉、彼の骨の骨であることを信じてことなのである。ここにこそ、この礼典の効力と強さのすべてがある。そしてこの信仰こそ、神が聖靈によって我々の魂に内的に働きたもうという信仰であり、神の御言を聞くことによって我々の耳に外的にその信仰を確かとされるように、彼の聖なる晩餐において、礼典的

パンとぶどう酒を飲食することによって我々の感覚にその信仰を確かとしたものである」<sup>(27)</sup> (傍点筆者)。

既述の如く、クランマーはふさわしい陪餐者のみが聖礼典の靈的食物を食し得るとしたが、それは信仰こそが(勿論、それは神の創成される賜物である)魂の口だからである。ふさわしからざる者は、実はキリストを食してはいない。

又、クランマーは司祭がその祭壇でキリストを常に新たに献げるという信仰を拒否した。十字架の犠牲はただ一回限りのものであり、過去から未来に至るすべての罪を贖うのに完全無比のものである。従って主の晩餐における犠牲の真の意義は、キリストの犠牲の記念(再現)にあり、それは又、会衆によってなされる「感謝と讚美の犠牲」でもある。<sup>(28)</sup> 更に彼は「……我々の罪の唯一の贖いであり充足でありたもう御方の死を記念して、我らのかよわき信仰が力づけられるために、キリストの聖なるみつくえにしばしばふさわしく近づくことを得しめたまえ」とも祈って、聖餐にはしばしば与かるべきことを勧めている。<sup>(29)</sup>

(5) クランマーの説く「二種の食事」について述べて見よう。一連のクランマーのことはを引用する。「真の信仰はかく答えるに違いない。……古い公同の信仰と、使徒、伝道者、殉教者及びキリストの教会の告白者に従ってかく言うであろう。即ち、聖礼典には、そしてその真の執行には、二つの部分、地的部分と天的部分とがあると。地的部分とは、パンとぶどう酒、天的部分とは、キリストご自身である。地的部分は我々の外にあり、天的部分は我々のうちにある。地的部分は我々の口で食べられ肉体的にその体を養う。天的部分は我々の内なる人によって食べられ内なる人を靈的に養う。地的部分はしばらく我々を養うのみであるが、天的部分は永遠に養う」。<sup>(30)</sup> 「キリストの真の礼拝者は、靈において彼を礼拝する。彼は栄光のうちに高きに在したもう故にである。礼拝者はキリストを引きおろし、身体的にその齒によって食さない。クリュソストモスも言ったように、心にあって靈的に引きあげられ、御父の栄光の座において養いたもう

である」。<sup>(31)</sup>「我々はその眼でパンそのものを見、口でそれを食するように、又、ぶどう酒そのものを見、それを飲むように、天にむけて心を仰ぎ望ませ、信仰によって霊的な眼で、十字架にかけられたもうたキリストを仰ぎ槍で突かれた彼の肉を食し、その脇を流れ出た血を信仰の霊的な口をもって飲むのである」。<sup>(32)</sup>これらの文章を読む時、ある人はクランマーの実体論的表現に注目するであろうし、又、他の人は「霊的」という言葉による限定を考え、又、交わり（参与）のきずなとしての聖霊に注目するであろう。筆者はクランマーにおける両者の微妙な調和に注目する。

Brooks の研究によれば、二種の食事をつなぐ表現の一つに、「スルスム・コルダ」(Sursum corda) アプローチがあると言う。信仰者が、天に臨在したもう主を仰ぎ求めて、その「魂と心とを挙げること」、そしてそこで信仰によってキリストの肉と血とに与かり生命を受けることを意味する。「この観念がミサの『スルスム・コルダ』から出たことに間違いはないが、それが『真の』現臨の教理に組み込まれるや否や、それは宗教改革の教会における典礼の、新しく価値ある強調点となったのである」。<sup>(33)</sup>

## 2. 祈禱書の形成過程に見るクランマーの聖餐論

(1) 祈禱書の形成過程に関する研究は多い。<sup>(34)</sup>ここでは主として E. C. Ratcliff に従いながら、<sup>(35)</sup>「第一公同祈禱書」(1549年)及び、「第二公同祈禱書」(1552年)の形成について学び、その点から再びクランマーの聖餐論に接近したい。

1532年、カール5世への特使を勤めたクランマーは前任者エリオット卿と共にニュールンベルクに滞在し、ルター派教会のレントの主日礼拝に出席したらしい。母国語による聖書朗読、説教、会衆の参加する礼拝、礼拝における聖餐などを通し、クランマーは古代教会の礼拝の豊かな遺産を思い浮べつつ、ここにこそ聖書と古代教会の伝統に立脚した教会の姿があると深い感銘を受けたことであろう。

1544年10月7日付のヘンリーへの手紙によれば、当時、彼は「英語連禱」(Litany)を執筆中であった。「英語連禱」は実に気高い彼の最初の作

品であり、「典礼に関する一人の天才の出現を告知するものであり、クランマーは神学上、典礼上の改革を進めて行く下地を」これで作ったと評されている。<sup>(36)</sup>

1548年、彼の手になる「聖餐式の式順」(The Order of the Communion)が出された。これはメランヒトンとブーツァーによってドイツ語で書かれ、ケルンの大司教ヘルマンによって発表された書物の英訳本(1547年)を基礎としたものである。陪餐への準備の式順は、罪の告白への勧告、罪の告白、赦しのことば、慰めのことば、謙虚をもって主の食卓に近づく為の祈りとなっている。これは、その後、順序の変更や改訂を経つつも今日に至るまで、アングリカンやメソジスト諸教会の式文の中に生き続けているものである。ただクランマーの慎重さは如実に示されており、当時も尚、母国語による礼拝は聖別祈禱を含むべきか否かを熟慮していた模様である。<sup>(37)</sup>

さて、クランマーを長としこれを補佐する十二名の委員は、クィニョネスの改定ローマ聖務時禱書(1535年)、中世ローマ式の連禱式文とそのクィニョネス、ルターによる改革式文、バシリオスやクリュソストモスによる東方教会の諸式文、ヘルマンの礼拝指針、北欧地方の式文などを諸資料とした。全体的に見て、第一祈禱書は保守的な労作とされているが、優れた材料であれば、東方のものであれローマ派のものであれルター派のものであれ、古代のものであれ当時のものであれ、自由自在に用いた判断と手法には驚き入る次第である。クランマーのこれらの材料を取捨選択する基準がはっきりとしていた。①聖書に親しみ御言を読む礼拝を目指すこと、②司式者と会衆とが同じ祈禱書で共に自国語の礼拝に参加できること、③福音による礼拝や儀式の純粋化を目指すこと、④古代教会以来の伝統をしっかりと検討した上で保存し採用すること、⑤同一国内では同一の祈禱書に統一すること等である。

1549年の第一祈禱書は、クランマーの典礼に関する長年に亘る研究と思考との結実であると言える。この様な祈禱書が出されることを、当時、ど

の聖職者や信徒が予想し得たであろうか。祈禱書の研究者たちは異口同音に、この祈禱書をルター派式文の英語版といった程度に過小評価すべきではないと主張する。クランマーはガーディナーとの論争の中で、祈禱書の聖餐式の部分の作者が自分であることを暗示する。殊にその聖餐聖別祈禱 (Eucharistic Prayer, Consecration Prayer, Anaphora, 又, Canon などと呼ばれる) は、ルター派と異なった独創的なものである。

クランマーによれば、聖別の真の目的は、キリストの受難と贖罪死を記念(再現)し、聖書的な「感謝と讃美との犠牲」に参加することであった。彼はセーラム用式によるラテン語式文を骨子として用いつつもそれを自由に駆使し、聖別祈禱の真の目的、ひいては聖餐式全体の真の目的に適合するように作り上げている。

第一祈禱書に対する大陸の改革者たちの反応を見ると、ヴェルミーリは1549年1月15日付の John Utenhove 宛の手紙で、事柄が急速に順調に進展していること、それがクランマーの不撓不屈の苦闘によることを述べ、「一教会が創設されること以上の困難な事業は世にない」と語っている。<sup>(38)</sup> ブーツァーも1549年4月26日付で、ランベスからストラズブールの牧師会へ手紙を送っている。渡英後なお日も浅い彼は、祈禱書の内容については明確な意見を持ち得なかったが、母国語による礼拝、義認の信仰、キリストの制定による聖餐、個人的ミサの禁止などの基本点に満足したようである。

しかしこの第一祈禱書は更に完全な改革の原理を盛り込んだ式文への、中間的な段階のものとして作成されたい。それが数年を経ずして第二祈禱書(1552年)が世に出た理由であろう。

(2) Ratcliff をして言わしめるならば、第二祈禱書におけるクランマーの意図はただ一点に集中していたのであった。それはただ単にラテン典礼を英語の形で回復したり純化する点にあったのではない。クランマーは全力を挙げて、「我が記念として、これを行なえ」と命じられた主イエス・キリストの命令を達成する為に、いかなる典礼的表現を与えるべきかと

いう問題と取り組んでいたのである。彼はキリストの死を記念(再現)し、物素を感謝をもって飲食することを、聖書的方向と聖書のデザインとで具現しようと苦闘した。確かに調停もあり妥協もあったろうが、この間のクランマーの努力はその殉教の血に匹敵するものであるとさえ言えよう。

重要な改訂は次のように行なわれた。①三重のキリエが十戒に代わられている。旧約聖書の朗読が復活したことは意義深い。②教会の為の執り成しの祈りが、聖餐聖別祈禱文から奉獻のことばの後へと移された。③三種の奨励 ④「スルスム・コルダ」の前に、罪の告白への勧告、罪の告白、赦しの宣言、及び慰めのことばが朗読されるようになる。⑤最も重要な変更は聖餐聖別祈禱文に加えられた変更である。聖霊の祝福と御言を求める祈りが削除され、聖職者と会衆の陪餐が聖餐制定語を唱えた直後に行なわれ、自己奉獻の祈りもかなり手を加えられて陪餐後の感謝の祈りと並んで用いられるようになったこと等である。

人はこの改訂の背後に、並行して進められていたであろう英国国教会の信仰箇条(42箇条、1553年)の第28条に表現されている聖餐理解を見ようとする。同条は両極端を排し、それらの中間において幅広い解釈の自由を認める傾向を持つと言うが、第二祈禱書が全く同じではないまでも同様な理解による改訂を経たことは十分に納得し得よう。

第二祈禱書は、その後、いくつかの大切な変更(聖餐聖別祈禱文などの穏健な回復)を経つつも、世界中のアングリカンに1662年版祈禱書として知られるものとなり、メソジスト諸教会を初めとして各教会式文に広く影響を与えて、それぞれの式文の実質的内容となっている。又、第一祈禱書も1637年スコットランドで作成された「祈禱書」の聖餐式式順に生かされている。

最後に、今日も我らの伝統の中で祈り続けられている、第二祈禱書の聖餐聖別祈禱の冒頭を引用して見たい。「全能の神、我らの天の父よ。神は我らを憐み、その独り子イエス・キリストをこの世に与え、我らの贖いの為に十字架の死を受けさせ給えり。キリストは(ひとたびその身を献げ)、



全くきずなき犠牲となり供物となり充足となりて、全世界の罪を贖い給えり。又、この式を定めて、我らが主の再び来たり給う日まで、くり返し主の尊い死を記念すべく、福音のうちに命じ給えり。……」。<sup>(39)</sup>我々はこの祈りの一句一句に、今まで述べてきたクランマーの聖餐観が、その終末論的な響きを湛えて凝結していることを新たに悟るのである。(尚、クランマーのその他の業績についても、前記の42箇条を初め、「大聖書」(1539年)や「説教集」(1547年)などを詳述すべきであろうが、ここでは割愛したい)。

#### IV おわりに

筆者は本紀要の前二集にわたって、ジョン・ウェスレーの聖餐論を概観した。<sup>(40)</sup>その際、ウェスレーの聖餐論の歴史的系譜を尋ねることに少なからぬ興味を抱かせられた。その結果の一端はこの小論として現われている。申すまでもなく、ウェスレーは英国国教会の子として国教会をこよなく愛し、その愛ゆえに教会の革新にも励んだ。当然、国教会の創建に尽したクランマーにも多くを学んだ訳である。1738年、アルダスゲートの年の11月半ば——彼は既にモラヴィア派を訪ね、ジョナサン・エドワーズの活動をも知り、彼自らソサエティ活動に尽力していた——、ウェスレーは国教会教理における信仰義認の中心性を思い巡らし、36頁から成る「教会において読まらるべき説教集」を編んだ。最初のエドワード時代の5篇は、その信仰の土台を築いたものとして重要視されたが、ウェスレーはためらうことなく、先ず、トマス・クランマーを選んだのであった。<sup>(41)</sup>

クランマーとウェスレー。150年の時の流れを隔てて生きた両者に相違は当然のことである。しかし多くの相違を乗り越えて一致点も多いのである。A. C. Outler は次の一致点を挙げる。彼らは共に英国の産み出した英国独特の神学者であり教会人である。英語そのものに与えた影響も大である。両者ともに実に幅広い態度をキリスト教会全体の伝統に対して有し

ていた。ウェスレー自身この宗教改革者に多くを負い、反ローマ派の旗色を明らかにしつつも大陸のプロテスタントの両極端を避け、エキュメニカルな視野を保ちつつ、全キリスト教会からの摂取とそれへの貢献に励み、神学や教理と祈りや証しの生活、礼拝と伝道及び愛の実践活動に調和のとれたキリスト教を生き抜いた訳である。

聖餐論に限定しても、相違点以上に多くの一致点が見られる。教父研究の広大さと独特さ、聖書を中心とした福音理解及び物事を判断する諸基準の確実さ、「現臨」や「犠牲」や「記念」に関する理解の的確さなど枚挙にいとまがない程であり、Ole E. Borgen ら研究者の指摘するところともなった。<sup>(42)</sup> 今日、聖餐論をめぐる教会間の対話が活潑化していることは喜ばしい限りである。<sup>(43)</sup> しかし事柄の中心がぼやけることなく、然もキリスト者の一致の表現である感謝と讃美の犠牲が声高らかに共に献げられる為に、我らは改めてこれらの先達に学び、その遺産を十分に活用せねばならないと痛感する次第である。

〔註〕

- (1) a. Peter Brooks, Thomas Cranmer's Doctrine of the Eucharist : An Essay in Historical Development, New York : Seabury Press, 1965, vii.
- (2) G. R. Elton, "The Reformation in England" The New Cambridge Modern History, Vol. 2, (ed. G. R. Elton), Cambridge : Cambridge Univ. Press, 1958, p. 243.
- (3) J. C. McLelland, The Visible Words of God : An Exposition of Sacramental Theology of Peter Martyr Vermigli A. D. 1500-1562, Edinburgh : Oliver and Boyd, 1957, 及び, Salvatore Corda, Veritas Sacramenti : A Study in Vermigli's Doctrine of the Lord's Supper, Zürich : Theologischer Verlag Zürich, 1975, など。
- (4) John T. McNeill, Unitive Protestantism : The Ecumenical Spirit and Its Persistent Expression, Richmond, Virginia : John Knox Press, 1964, pp. 221-254.
- (5) G. R. Elton, op. cit., p. 243.
- (6) 半田元夫, 今野国雄「キリスト教史Ⅱ」, 東京 : 山川出版社, 1977, 144頁。

- (7) 同上, 145頁。
- (8) The Oxford Dictionary of the Christian Church, ed. F. L. Cross, London : Oxford Univ. Press, 1958, p. 352.
- (9) Horton Davies, Worship and Theology in England : From Cranmer to Hooker 1534-1603, Princeton, N. J. : Princeton Univ. Press, 1970, p. 111.
- (10) 石原 謙「キリスト教の展開」, (ヨーロッパ・キリスト教史下巻), 東京 : 岩波書店, 1972, 498頁。
- (11) G. W. Bromiley教授は, Library of Christian Classics, Vol. 24,の「ツヴァイングリ・ブリンガー」の編訳者でもあり, Encyclopaedia Britannica には, 「ツヴァイングリ」を寄稿している。
- (12) P. S., I, pp. 5-6.
- (13) P. S., II, pp. 217-218.
- (14) Defence, pp. 234-235.
- (15) P. S., I, p. 374.
- (16) P. S., II, p. 375.
- (17) Defence, p. 378.
- (18) Ibid., p. 195, P. S., I, pp. 12, 16, 134, 148.
- (19) P. S., I, p. 11.
- (20) Ibid., p. 395.
- (21) G. W. Bromiley, Thomas Cranmer, Theologian, N. Y. : Oxford Univ. Press, 1956, p. 72.
- (22) P. S., I, p. 94.
- (23) P. S., II, p. 213.
- (24) P. S., I, p. 47.
- (25) Ibid., p. 150, cf., 342, Defence, pp. 10, 21, 22, 23.
- (26) Defence, p. 167. P. S., I, pp. 24, 87, 224, 342.
- (27) Ibid., p. 306.
- (28) P. S., II, p. 150, Defence, p. 256, cf., 235, 252, 254.
- (29) P. S., I, p. 367. cf., pp. 71, 88, Defence, p. 159.
- (30) Ibid., p. 337, cf., pp. 17, 66, Defence, pp. 11, 30, 59, 69, 75, 130, 160, 170, 194.
- (31) Ibid., pp. 235-236, Defence, pp. 83-85, 131, 154, 162, 186.
- (32) Ibid., p. 317.
- (33) Peter Brooks, op. cit., p. 102.

- (34) 常に参照したものだけを挙げると, Proctor & Frere, A New History of the Book of Common Prayer, Macmillan, 1951, M. H. Shepherd Jr., The Oxford American Prayer Book Commentary, Oxford Univ. Press, 1950, The First and Second Prayer Book of King Edward VI, Every man's Library, など。
- (35) E. C. Ratcliff, Liturgical Studies, (eds. A. H. Couratin & D. H. Tripp), London : S P. C. K., 1976, pp. 184-202.
- (36) E. Gordon Rupp, "Reformation," Encyclopaedia Britannica, Vol. 19, Chicago : Encyclopaedia Britannica Inc., 1970, p. 44.
- (37) P. S., II, p. 151.
- (38) Peter Brooks, op. cit., p. 75より引用。
- (39) The First and Second Prayer Book of King Edward VI, Everyman's Library, p. 389.
- (40) 拙稿『主の晩餐におけるキリストの現在 —— 今日のエキューメニカルな神学的対話へのジョン・ウェスレーの貢献をめぐる』, 「神学と人文」, 1975年, 1976年, を参照されたい。
- (41) John Wesley, (ed. A. C. Outler), N. Y. : Oxford Univ. Press, 1964, pp. 121-133, 尚, クランマーのその説教の原文は, (The Library of Christian Classics, Vol. 26) English Reformers, pp. 262-271にある。
- (42) Ole E. Borgen, John Wesley on the Sacraments : A Theological Study, Nashville : Abingdon Press, 1972, p. 68.
- (43) Word & Sacrament, (ed. R. R. Williams), S. P. C. K., 1968 は, アングリカンとドイツ福音教会との対話, Modern Eucharistic Agreement, S. P. C. K., 1973 は, アングリカンとローマ・カトリック, アングリカンとルター派教会との対話等, この他, Anglican-Lutheran International Conversations, (1970-1972), S. P. C. K., 1973 など各種。尚, Prayers of the Eucharist : Early & Reformed, trans. & eds. R. C. D. Jasper & G. J. Cuming, London : Collins, 1975, のような有益な資料集も出されている。